

再び『宰相たちの歴史』について：写本と刊本の間

清水，宏祐
九州大学大学院人文科学研究院歴史学部門：教授：イラン史

<https://doi.org/10.15017/16914>

出版情報：史淵. 147, pp.173-203, 2010-03-01. Faculty of Humanities, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

再び『宰相たちの歴史』について

—写本と刊本の間—

清水 宏 祐

はじめに

カイロのダール・アルクトゥブには、『宰相たちの歴史』*Ta'rikh al-Wuzarā'* と呼ばれる世界で唯一のペルシア語写本がある (Dār al-Kutub, Ta'rikh Fārsī, Ṭal'a No.7)。これを最初に紹介したのは、ルーサー Luther であり、彼は、テヘラン大学中央図書館所蔵のマイクロフィルム (f.2690) をもとに、その内容を略述した。それによれば、写本は全236フォリオよりなり、イラク・セルジューク朝時代の18代、16名 (2名は再任) の宰相の記録であるという。ルーサーは、この写本には、第86フォリオからはじまる汚損のため、それ以降、特に最終部分の一部に判読不可能箇所があることを指摘した (K.A.Luther, "A New Source for the History of the Iraq Seljuqids: *The Tārīkh al-Vuzarā'*", *Der Islam*, 45, 1969, pp.117-128.)。

筆者は、1979-1980年にかけてダール・アルクトゥブにて写本調査を行い、直接原本にあたって内容を検討する機会を得た。汚損箇所は、ルーサーの指摘よりはやく、第71フォリオ前後から紙の固着による文字の反対葉への転写がはじまり、101フォリオより先では、下3行の汚れが顕著となる。特に第230フォリオ以降では、汚れと文字の転写がひどく、読むことは困難になるが、原本を斜めに光にかざすことによって、インクの光沢を利用してほとんどの難読箇所を解読、筆写することができた。写本調査の結果は、「ペルシア語写本「宰相たちの歴史」について」(『内陸アジア・西アジアの社会と文化』、山川出版社、1983年、623～646ページ) として発表した。これは写本の内容紹介、著述年

代の推定、史料として使うことによって、官僚機構の一端を具体的に明らかにすることができるという実例を示したものであって、難読箇所を含めて、史料そのものを逐一閲覧に供するものではなかった。

その後、この史料は、1363/1985年に、イランのダーネシュパジューフ Moḥammad Taqī Dāneshpazhūh の校訂によって『宰相たちの歴史』(*Ta'rikh al-Wuzarā'*)の名で刊行されたため、だれでも容易に使用することができるようになった。

筆者は、当初よりこの写本を校訂する希望をもっていたが、ダーネシュパジューフ版の刊行により、一応紹介の任は終わったと判断していた。

ところが、ダーネシュパジューフ校訂本を詳細に検討すると、本来の写本とは記載されているフォリオ数が異なること、内容の欠落箇所があること、汚損のための難読箇所のうち、空白のままに放置されているところがあることがわかった。これらは、なお検討を要する重要な問題である。

また、最近この写本の別の校訂本が、モダッレスィー (Ḥoseyn Modarresī Ṭabāṭabā'ī) によって『*Naftha al-Maṣḍūr* 続編』*Dhayl Naftha al Maṣḍūr* のタイトルで出版された (New Jersey, 2007)。この新しい刊本を瞥見すると、こちらにもダーネシュパジューフ校訂本に通じる問題、つまりフォリオ数の相違、内容の脱落があることがわかった。また、残念ながら難読箇所が読解されないままとなっているところも、少なからずみうけられる。

二つの刊本は、ともにテヘラン大学所蔵のマイクロフィルムをもとに、校訂作業を行っており、元の写本は参照していない。

本稿で、もう一度『宰相たちの歴史』写本について検討するのは、二つの校訂本のもつ問題点を明らかにするとともに、写本の原本そのものに立ち返って、史料の本来の姿を示すことが必要であると考えたためである。

二種の刊本

ダーネシュパジューフ校訂本は、テヘランの Mo'asess-e Moṭāle'āt-o-Tahqīqāt-e Farhangī より刊行された (*Ta'rikh al-Wuzarā'* az Najm al-Dīn

Abū al-Rijā' Qummī dar sāl-i 584. Moḥammad Taqī Dāneshpazhūh (ed.), Tehrān, 1363/1985)。

構成は、目次・序文（ペルシア語数詞表記による七～五一ページ、うち上掲のルーサー論文のペルシア語訳十四ページを含む）、写本の初めと終わりの箇所の写真4葉（ページ番号なし）、『宰相たちの歴史』本文（pp.1～269）、索引（pp.271-439）よりなっている。

序文の中で、ダーネシュパジューフは、本書の著者をナジュム・アルディーン・アブー・アルリジャー・クンミーとしている。しかし、ダーネシュパジューフ自身は、とくに著者の同定研究を行ってはおらず、これはフェアバンクス Fairbanks の論によっている。（D序文七～九ページ、フェアバンクス p.8）。

モダッレスィー版も著者名決定には、独自の推論は行っておらず、ダーネシュパジューフ同様に、フェアバンクスの論考に依拠している。モダッレスィーが、同一の写本を『宰相たちの歴史』ではなく、『*Naftha al-Maṣḍūr* 続編』というタイトルを付けて出版したのも、同じくフェアバンクスの研究をもとにしているとする。モダッレスィーは、「史料の本文」(matn) には『宰相たちの歴史』という名はなく、フェアバンクスが著者決定の論拠としてひいている、『マルズバーン・ナーメ』にある「ナジュム・アルディーン・アブー・アルリジャー・アルクンミーがなした『*Nafsa al-Maṣḍūr* 続編』・・・」との記述をもとに、本史料のタイトルを、ダーネシュパジューフ版とは異なるものとした（Mの序文 pp.6~7 および、同氏のウェブサイト上の論文「『*Naftha al-Maṣḍūr* 続編』におけるコム」参照）。ただし、『マルズバーン・ナーメ』の原文をみると、モダッレスィーが引用する「*Dhayl Naftha al-Maṣḍūr*」の「Dhayl」と「*Naftha al-Maṣḍūr*」の間には、hamīn（まさにこの）の語があることがわかる。モダッレスィーが落としている、この語を補うと、『マルズバーン・ナーメ』の該当箇所は、「ナジュム・アルディーン・アブー・リダー（ママ）・クンミーのなした、まさにこの『*Naftha al-Maṣḍūr*』の続編・・・」となる（『マルズバーン・ナーメ』 p.5）。

『宰相たちの歴史』が、*Naftha al-Maṣḍūr* の内容を受け、続編として書かれ

たことは、本写本史料の冒頭部に、著者自らが「ウスターズ・シャラフ・アルディーン・アヌーシルワーン（ヌーシールワーン）Ustādh Sharaf al-Dīn Anūshirwānは、カワーム・アルディーン・アブー・アルカーシム Qawām al-Dīn Abū al-Qāsim（アッラーフよ、その墓に光を与えたまえ）の話のところで、彼のスルターン・サンジャル Sanjar の下でのワズィール職、および彼の二度目のワズィール職について十分に説明することなく、*Naftha al-Maṣḍūr* を完結させた。この要約を編むことにねらいを定めた以上、（まず）カワーム・アルディーンのスルターン・サンジャルの下でのワズィール職と、より賞賛すべき復帰であるイラクの（イラク・セルジューク朝のスルターン・トゥグリル（Ⅲ世）ブン・ムハンマド Ṭughril b. Muḥammad の下での）ワズィール職の状況について思い起こす（yād kardan）こと、それをまとめることが必要である（ダーネシュパジューフ版、モダッレスィー版ともに bāz kardan としているが、清水は、写本を尊重して yād kardan を採る。f.2a, D.p.2, M.p.12, A.p.40、清水262ページ）」として、カワーム・アルディーンについての記述から本書を説き起こしていることから明らかである。ただし、写本の中には『*Naftha al-Maṣḍūr* 続編』という名は一切書かれてはいない。また写本冒頭部では、本文を他フォリオよりも2行少ない14行にとどめ、上2行分のスペースに、本文と同一の写字生によると思われる大きな赤い文字でタイトルが、「宰相たちの歴史 *Ta'rikh al-Wuzarā'*」と明確に書かれていることは無視できない。赤のインクは、後述のように、それぞれの宰相職の章のタイトルにも使われている。ほかに比較するものがない孤写本だけに、その表記は重んじるべきである。

話は前後したが、モダッレスィー版は、序文（pp.3~9）、本文（pp.11~303）、小註等（pp.305~312）、索引（pp.313~324）よりなる（Najm al-Dīn Abū al-Rijā' Qummī, *Dhayl Naftha al-Maṣḍūr*, Ḥoseyn Modarresi Ṭabaṭabā'ī (ed.), Mo'assese-ye Enteshārāt-e Zagros, New Jersey, 2007）。

モダッレスィー版では、本文最初の文章「卓越せる知性と全き寛大さの持ち主であるアッラーフに讃えあれ。預言者ムハンマドと、その聖なる一族、敬虔

なる教友に恵みあれ」をタイトルとして太字で掲げ、「これから物語る出来事は、このようにして、自分が見聞きしたそのままのものである。好意の目をもって見、もし私の過ちに気付いたとしても、それが温かく受け入れられるよう (f.2a、清水 p.626)、許してくれるのが友たるものの倫理 (アッラーフよ、それらを増やしたまえ) というものである」までを序章としている。しかし、原文では、ここはとくに強調されて書かれてはいない。また、原文冒頭最初の2行を使って太字で書かれた「宰相たちの歴史」の語句をモダッレスィー版が落としていることには、筆者は賛同できない。

モダッレスィー版は、カワーム・アルディーンの宰相職についての記述 (上掲のウスターズ・シャラフ・アルディーンは、…から始まる) の前に (1)Wizārat-i Qawām al-Dīn Abū al-Qāsim との太字のタイトルを付けて、ここから第1章が始まることを示している。ダーネシュパジューフは、モダッレスィーが序章とした部分の前に (1)Wizārat-i Qawām al-Dīn Abū al-Qāsim との同じタイトルを付けて、第1章とする。ただし、元の写本では、このWizāratからはじまる語句は一切ない。

次の2代目宰相についての記述では、写本には「シャラフ・アルディーン・アリー・ブン・アビー・アルリジャーの宰相職 Wizārat-i Sharaf al-Dīn ‘Alī b. Abī al-Rijā’」の表題の文字が赤で書かれている。この形式は、以下最終のワズィール、サーヒブ・アドゥッド・アルディーン Ṣāhib ‘Aḍuḍ al-Dīn (f.220b) についての記述まで踏襲され、17代の宰相ごとに繰り返して書かれている (ただし、Bāb や Zhikr、Faṣl などの章を示すような語句は使われていない)。

モダッレスィー版については、アクカレによる書評がある。この中で、アクカレは、二つの刊本を比べ、30箇所以上にわたって、語句の訂正を試みている。

一例をあげれば、モダッレスィー版の24ページ (写本ではf.12a)、ダーネシュパジューフ版12ページでは、どちらも چون شرط سابق است که در حق همه の次に کس の語句が落ちていることを、アクカレは指摘している。この指摘は正しく、写本には、کس と明確に書かれている。これは両者の不注意に属することである

う（アクカレ書評、40ページ）。

アクカレは、元の写本を参照してはならず、以下で本稿が扱う、刊本における内容の欠落には気付いていない。また、写本の汚損による難読箇所として両刊本が空白としているところの復元、あるいは汚損のためにそれぞれで読みの違うところをどう改めるかについての論評も行っていない。

以下で本稿が指摘・訂正することと、アクカレ書評の訂正との間には、内容が重なるところは全くない。アクカレ書評は、本論とあわせてお読みいただきたい。

写本のフォリオ数について

写本の最終部分には、フォリオの右上に明確に236と、アラビア語式の数字を書きなれた者による筆跡で書かれている。ダール・アルクトゥップにおける整理によって、236と後代に書きこまれたもののようで、この番号に従えば、写本は全部で236フォリオからなり、最終部は236aとなる。筆者の手許には、原写本から直接複写したものがある。この枚数を数えて確認しても、フォリオの総数は236枚であり、抜けおちはない。しかし、ダーネシュパジューフ版では、この最終フォリオに対応する校訂テキストに、234a (234r) の番号をふっている (p.269)。また、序文では、彼は、この写本の枚数を全233葉 (barg、ペルシア語表記による三三ページ) と紹介している。写本はf.1bからはじまっている完全なものなので、彼の説明は、自身の校訂結果とも矛盾している。また、ダーネシュパジューフ版につけられている写本の最終箇所の写真でも、右上のフォリオ番号が236と書きこまれていることが明瞭に確認できるが、これについても校訂者の言及はない。

一方、モダッレスィー版は、最終箇所に235a (235r) の番号をふっている (p.303)。これは、写本ともダーネシュパジューフ版とも違っている。なぜこのようなことが起こったのだろうか、以下でその理由を解明し、写本と照合して訂正を加えることにしよう。

写本の綴じ違い

ダーネシュパジューフは、写本におけるフォリオの位置について、訂正を加えている。f.64となっているものは、本来はf.47とf.48との間に来るべきものであったという。つまり装丁のミスによって、1葉が後方の離れた箇所に綴じられ、その後で通しのフォリオ番号が整理者によってふられたことになる。これを刊本では、元に戻して編集している。元の写本にふられたフォリオ番号でいえば、47,64,48,49…… ……63,65,66……以下最終葉まで……と整理しなおしてテキスト化しているわけである。したがって、刊本の中で元写本のフォリオ番号として引用される注記はf.47b、f.64a、f.64b、f.48aの順となり、f.63bの次はf.65aまで飛んでしまうことになる。

厳密に言えば、47と48の間が一つ増えたため、以下のフォリオ番号は48+1、49+1……63+1と、65の前までは調整すべきものとも考えられる。しかし、これを行えば、さらに混乱が生じる可能性がある。ダーネシュパジューフ版では、48～63フォリオには、もとのままの番号が書かれている。(D.pp.52,53,70,71)これは、写本に書き込まれたフォリオ番号を尊重しているわけで、その限りでは正しい態度である。この原則でいえば、カイロ写本のフォリオ番号と、ダーネシュパジューフ版がフォリオ番号として引用しているものは、同一となるはずである。しかし、最終フォリオは、ダーネシュパジューフ版では234となっているので、どこからか原本との間で狂いが生じていることになる。これについては、後で詳述する。

写本の綴じ間違いの箇所は、第3代ワズィール・シャラフ・アルディーン・ヌーシルワーン（ヌーシールワーン）・ブン・ハーリド Sharaf al-Dīn Nūshirwān b. Khārid についての章 (f.43b～f.75b) の中で起こったものである。綴じ違いのf.64a～f.64bは、「シャラフ・アルディーンを称賛する詩が数多く語られている」としてその一例としての詩を紹介しているところにあたる。この1葉が彼についての章の一部であることは明らかであり、前後の文章の続きかたからみても、f.47bとf.48aの間に来ることには疑問の余地はない

(D.pp.52~53)。これを発見したことは、ダーネシュパジューフの功績である。

さて、彼は、校訂本の中で、上でも述べたように宰相の章ごとに番号をふっている。初代・カワーム・アルディーン・アブー・アルカーシム・アルダルガズィーニー Qawām al-Dīn Abū al-Qāsim al-Dargazīnī (f.1b~f.25a、写本にこの宰相の名を記す章のタイトルだけはない。前述) を1とし、最後のワズィール・サーヒブ・アズィーズ・アルディーン Ṣāhib ‘Azīz al-Dīn (f.231a~f.236a) を17としている。これでは、18代のワズィールのうち、1代分が抜けてしまうことになる。刊本を逐次検討すると、第13代目のワズィール・ファフル・アルディーン・カーシー Fakhr al-Dīn Kāshī (f.176a~f.182a) の章のタイトルのところで、ここだけはダーネシュパジューフが番号を付け忘れていることがわかる (p.201)。

フォリオの綴じ違いの問題に戻ろう。モダッレスィーは、ダーネシュパジューフの判断を踏襲して、原写本のf.64をf.47とf.48の間に戻して校訂している (pp.69~70)。この点では、両者の構成は同一である。モダッレスィー版でフォリオ番号として引用している番号も、65葉以降も元の写本と同じになるはずであるが、最終葉は235と、一枚少なくなっている。

以上述べた「綴じ違い」は、全体のフォリオ枚数には影響を与えることのない問題である。

見開き2ページ分の欠落

二つの刊本の最大の違いは、モダッレスィー版が「ダーネシュパジューフ版では、f.180b-f.181aの丸々1葉 (waraq) が欠落している」ことを指摘し、この内容をテキストに追加していることである。ただし、f.180b-f.181aとは、1枚のフォリオの両面ではなく、写本を開いたときの右側と左側という別のフォリオの裏と表にあたるのだから、これは「1葉のフォリオの欠落」ではなく、「校訂時にマイクロフィルムの1コマを見落としたり」とすべきであろう。

モダッレスィー版では、ダーネシュパジューフ版のf.180aの次にf.180bとf.181aを補った後、ダーネシュパジューフ版ではf.181aとなっている部分を

f.182a とフォリオ番号を繰り下げ、以下最終葉まで+1の番号をふっている。終結部のフォリオが、ダーネシュパジューフ版では、繰り返し述べるように f.234a となっているのに対して、モダッレスィー版で f.235a となっているのは、そのためである。校訂本に参照用にふるフォリオ番号が、原写本にふられた整理番号をそのまま記載すべきであることは、すでに述べたところである。

さて、モダッレスィーの指摘した欠落部は、第13代目のワズィール・ファフル・アルディーン・カーシー Fakhr al-Dīn al-Kāshī の章 (f.176a~f.182a) の中にある。ダーネシュパジューフ版にはない箇所なので、モダッレスィー版の校訂の是非を確認するために、写本の原文を掲げよう。改行は写本どおりとしている。1 フォリオ片面16行そのままである。字法は写本にならい、bi は、次の名詞と連続させている。語末の h の上のハムザも写本のとおりとして、エザーフェがかかる部分であっても書いていないところがある。p、ch、g は、写本ではもちろん b、h、k と表記されているが、ここでは改めたものを記している。

(180b)

کر و فری فرمود. و از پیش بر خاست بساوه آمد.
 در خدمت سلطان ارسلان روی بهمدان
 نهاد. امیر اینانج ری و قم و ساوه و آبه خرج کرد.
 فخر الدین وزیر بهمدان در گذشت. تف سنان
 مرگ سپر بقا از دست وی بیفکند. بلند همت و
 والا بود. میان دود روزگار فرّ او روشنی
 روز بود. فخر تبار بود. و عاقله دودمان دولت.
 ری و قم و ساوه و آبه آن زمستان بی مانعی در
 دست نائبان امیر اینانج بماند. در حمایت برف
 کافور رنگ و فضل کافور طبع چون فصل بهار
 جهانرا بیاراست. و مرغان نوای گوناگون زدند
 و اهوان مینا سم و بیجاده لب شدند. اتابک شمس
 الدین از آذربایگان روی بری آورد. شوکت
 او پیش از آن بود که بر آنچه امیر اینانج کرد اعضا

کردی. نظر خوش جز در آینه و آب ندیدی
امیر اینانج مدتی در ری محاصر شد. متنفسی و متعلق

(181a)

نداشت. دیگ امید او جوش بر آورد و بسر بر آورد.
نالنده تر از رباب شد. لب او تجلدی می نمود و
چون برق می خندید، و دل او چون ابر می گریست
در ری محاصر بماند. منفذی نمی دید. خناق او
را تنفیزی نبود. چون مرغ در قفص می جست اگر راه
بودی که بیرون آمدی بچندانک دیده بر هم زدی.
بط را از بسیاری آب باک نباشد. بی خواب و
بی خور شد. کباب از گل جگر می خورد. در تجلدی
که می نمود چون شمع بود که افروزد و سوزد. ندب
آخر عمر بود. پای بیفشرد. دست خون بود نه می
باخت. غلامکی دو سه پاسی از شب گذشته او را
هلاک کردند. سمن او خار شد و بخت او چون چشم
غلامانش خفته آمد. باد حوادث کلاه دولت
او بیفکند. درین دنیا سخت کمان راحت را بتیر
نتوان گرفتن. متعلقان او چون گل جامه خاک
کردند. آن وشاقان که امیر اینانج بر دست ایشان

(181b)

کشته شد

この箇所では、アミール・イナンチ Amīr Īnanj (Sunqr) によるレイ Rayy、コム Qumm、サーヴェ Sāwa、アーベ Āba の領有、ハマダーンにおけるワズィール・ファフル・アルディーン Wazīr Fakhr al-Dīn の死去とそれを悼む文、アターベク・シャムス・アルディーン Atābek Shams al-Dīn (Ildiguz) によるレイ包圍 (562/1166~1167年) と、それによるアミール・イナンチの苦

境、ついには彼が「犬にも劣る」グラームたちの手にかかって殺害されるまでが、比喻を交えて描かれている。

写本とモダッレスィー版とを比較すると、後者で再現された180b～181aにある文章には、以下のような問題があることがわかる。

モダッレスィー版の180bにあたる箇所では、写本の6行目にあたる *raushānī* の後に *ū* が入っているが、原文にはない。下部の難読箇所では、*shaukat-i ū pīsh az ān būd* とすべきところを *shaukat-i Atābek Shams al-Dīn būd*、*bar ānche* を *'ilāj* と誤読、15行目では *kardī* から *āina* までの6つの単語が落ちている。また、181aでは、1行目の *award* とすべきところが *amad* となっており、6行目の *ke* も落ちている。また、14行目最後の *bi-tīr*、15行目最後の *jāma khāk* が読解できず、16行目 *bar dast* を *bi-dast* と誤読している。

ともあれ、見開き2ページ分を補填したことが、モダッレスィー版の大きな功績であることは確かであろう (M.pp.233~235)。

なお見落とされたページ欠落箇所

ダール・アルクトゥップ所蔵のオリジナル写本の最終箇所は、再三述べたように f.236a である。本文には欠落葉はない。ダーネシュパジューフ版が 234a、モダッレスィー版が 235a で終わっているということは、両者には、なおも1フォリオ、あるいは見開き2ページ分の欠落があることになる。それは、どの部分だろうか。

写本のはじめから逐一両刊本を比較対照していくと、第18代目のワズィール・サーヒブ・アズィーズ・アルディーン *Ṣāhib 'Azīz al-Dīn* についての記述 (f.231a～f.236a) 中に、元の写本の f.233b と f.234a にあたる部分が、どちらの校訂本でも落ちていることがわかる。これは、180b・181a と同じく、見開きの右左ページとなる。別々のフォリオの裏と表にあたる、マイクロフィルムの1コマ分である。

欠落部を刊本に対応させていえば、ダーネシュパジューフ版では、f.232a (1

を加えてf.233aとすべきだが。p.267) とf.232b (1を加えた上で、挿入分のさらに1を加えてf.234bとすべきである。p.267) の間が欠けていることになる。モダッレスィー版では、これはf.233a (p.301) とf.233b (挿入分の1を加算してf.234bとすべき。p.301) の間にあたる。

以下に、その欠落部分の全文を掲げる。

(233b)

اتابك مظفرالدين بر فور بهمدان آمد. سلطنت
و امرا که در خدمت او منتظم بودند روزی
چند بهمدان و باغها و طرقات محصن شدند
مترصد وصول اتابك علاء الدين پسر اتابك
ارسلان ابه ابن اقسنقر. اتابك مظفر الدين
بر جانب بغداد منزلی چند برفت. مخلص الدين
ابرقوهی سيشه زهر بر مائده دولت فشاند.
دست بقنضه کمان فساد زد. و تیرها پراز کرد
جمال الدين ای ابه را که مخدوم او بود و امیر
مخالفت سلطان اغراء کرد. حلقه بر در غدر
زد. سیف الدين سنقر روس را پیش از آن اول
ای ابه باستصواب مخلص الدين قصد کوه بود و گشته م
و قتلت يوم قتل الثور الابيض یاد
نیاورده سلطان طغرل بدین غدر که تقریر
کرده بودند واقف شد. امیر ای ابه و از ابه را

(234a)

در بارگاه گرفتند و سیاست کردند. مخلص
الدين این روز مجروح شد. با دیگر روز مصلوب
آمد. سلطان طغرل بر جانب آذربایگان حرکت
فرمود. سلطان سنجر و اتابك مظفر الدين
بامدادی از لشکر امیر المومنین بهمدان آمدند.
پادشازاده قتلغ اینانچ چون دید که سلطان

طغرل بندگان پدرش اتابك محمد را سياست
کرد. از همدان روی بری نهاد. با عمش اتابك
مظفر الدين موافقت نمود. امير اسفہسالار
نور الدين و الب اقسنقرا پیش از حرکت سلطان
طغرل بمازندران. اتابك مظفر الدين ايالت
ری فرموده بود. بوقت آنکه پادشازاده
قتلغ اينانج بسبب قتل بندگان پدرش از سلطان
طغرل مفارقت نمود. امير اسفہسالار نور الدين
را خلاص داد شهر قم در اعتداد ديوان او
آمد. صدر بدر الدين عبد الصمد زنگانی كدخدی

(234b)

او بود اثر كفايت او نقش سكه آمد.

欠落部を復元したf.234aの最終16行目の結尾が、次のf.234bの頭にくるのは当然であるが（フォリオの表と裏は、離れることはない）、刊本の対応箇所ではどうであろうか。上に掲げたf.234aは、f.234bつまりダーネシュパジューフ版のf.232b（ママ）、モダッレスィー版ではf.233bとしているところ（ママ）の第1行目とも続いていて、意味も通っている。一方、両刊本のf.232a（ダーネシュパジューフ版・ママ）、f.233a（モダッレスィー版）の最後の部分と、今回復元した2ページのうちの最初の部分とは、どのようにつながるのだろうか。これは、刊本でみても、内容は、つながっていない。というのは、f.232a（D.ママ）、f.233a（M.）の最後の4行は詩（ドゥー・バイト）になっていて、次の文章とは独立しているのだから、復元部の冒頭は、文章の始まりでもあるわけだ。しかも刊本では、どちらも詩の部分を完全には読み取ることができず、一部を未完のままに残している。

二人の校訂者が、ともにこの箇所の欠落を見落としたのは、欠落部が独立した文章からはじまっており、しかもその前のページが読めなかったため、欠落

による文意の不通がなく、注意を払うことができなかつたためであろう。

しかし、刊本で欠落したf.233b～f.234aの内容は、イラク・セルジューク朝末期の重要な出来事についての記述で満ちている。以下に、その内容を略記してみよう。

最後のスルターン・トゥグリル三世（在位571/1175～590/1194年）と大アターベク・ムザッファル・アルディーン・クィズィル・アルスラーン Atābek Muẓaffar al-Dīn Qizil Arslān の内戦。ムザッファル・アルディーン のハマダーン襲撃と、トゥグリル三世軍による防衛。アターベク・ムハンマド・パフラワーン Atābek Muḥammad Pahlawān のアミール、アイ・アバ Amīr Ay Aba とアズ・アバ Az Aba が、そのキャドホダー Kadkhudā であったムハッリス・アルディーン Mukhalliṣ al-Dīn の姦策によりスルターンに謀叛を企てたが発覚し、トゥグリル三世によって処刑されたこと。ムハッリス・アルディーンも負傷し、後に絞首刑となったこと（f.233b）。

トゥグリル三世のアゼルバイジャン遠征。サンジャル Sanjar、ムザッファル・アルディーン、カリフ（アルナーシル al-Nāṣir）が派遣した増援軍による三者連合軍のハマダーンへの来寇。ムハンマド・パフラワーン の息子、クトゥルグ・イナンチ Qutluḡ Īnānj のトゥグリル三世に対する背反、イナンチのムザッファル・アルディーンとの同盟。トゥグリル三世が、アミール・イスファフサーラール・ヌール・アルディーン Amīr Isfahsālār Nūr al-Dīn とアルプ・アク・スンクル Alp Aq Sunqur をマーザンダラーンに派遣したこと。イナンチがヌール・アルディーンを殺害してクムを奪取したこと（f.234a）。等々である。これらの記録は、他の史料には現れないものを含んでいる。

また、『宰相たちの歴史』の執筆年代を推定するうえでも、この記述は役に立つ。これらの記述と、年月日の記録のある『セルジューク・ナーメ続編』を比較してみると、バグダードからのカリフの増援部隊到着が、584年サファル月の終わり/1188年4月、トゥグリル三世によるムザッファル軍の撃退が、同年ラビーア1月/同5月で、アイ・アバ、アズ・アバの処刑が同ジュマダー1月/同6月～7月である。また、トゥグリル三世のアゼルバイジャン遠征

は、ラジャブ月の少しあと（同年12月か翌年1月？）であり、帰還した後のワズィール・アズィーズ・アルディーンの処刑が同年ズー・アルヒッジャ月7日/1189年1月27日と記録されている。『宰相たちの歴史』では、この最後のワズィールの処刑については述べられていないので、この時点より前の著述であることになる。ルーサーも、その論考の中でアイ・アバ、アズ・アバの処刑について言及している。

（『セルジューク・ナーメ続編』、p.87, Luther, p.120.）。

難読箇所

『宰相たちの歴史』の写本は、それぞれのフォリオが原則として16行より構成されている。そのうちの下3行に、前述のように汚損があって読みにくい箇所があるため、どちらの刊本でも空白としているところがある。

校訂で空白にされている箇所は、第4フォリオの裏にもある。

(f.4b)

دار الخلافه مقدس و خطبای روز آدینه نیامی. اختیار الدین در لطافت....

سلطان به چه طریق مهمان شاید آوردن

しかし、この間は、写本でも2行が空白のままあけているところであって、難読箇所とは違う。ダーネシュパジューフは、そのまま写本の空白箇所としているが（D.p.4）、モダッレスィーは*Nasā'im al-Ashār*から借用した文章をこの間に挿入している（M.p.15）。

写本第5フォリオの裏にも、同様に3行の空白部があるが、これも難読箇所ではないので、本稿では省略する（f.5b, D.p.5, M.p.17）

以下は、写本下部の汚れによって、マイクロフィルムでは解読できず、二つの刊本で「……………」としてあけたままになっているところである。刊本と元の写本を対比させてみよう。

f.198a

(دانشپژوه ص. 227)

شرف الدین نوشروان ذکر او به پای زده است، و مرکب جهان نورد او از آخری بدین حیری (؟) بسر
باز زده،

(مدرسی طباطبائی ص. 256)

شرف الدین نوشروان ذکر او به پای زده است، و مرکب جهان نورد او از.....چنین سر باز زده،

(نسخه اصلی)

شرف الدین نوشروان ذکر او بی پای زده است. و مرکب جهان نورد او از آخری بدین
چنین بسر باز زده.

ここは、写本には汚れない箇所で、モダッレスィー版の空白の意味が不明
である。

f.200a

(دانشپژوه ص. 230)

در عهد سلطان نور الدین محمود پسر زنگی که صاحب بنام بود، و روی زمین به شکوفه عدل
او نیی بویا،

(مدرسی طباطبائی ص. 258)

در عهد سلطاننور الدین محمود پسر زنگی که صاحب شام بود و روی زمین به شکوفه
عدل او نی بویا،

(نسخه اصلی)

در عهد سلطان نور الدین محمود پسر زنگی که صاحب
بنام بود. و روی زمین بشکوفه عدل او جمعی زمان

モダッレスィー版の空白部は不要である。なお、同版は、Nūr al-Dīn
MaḥmūdをṢāḥib-i Shāmとする。校訂者の裁量に属する部分で、写字生の誤
写の可能性もある。その限りではこの校訂の方が正しいともいえるが、その旨

の注記が望ましい。写本では bi-nām とあるので、それを尊重してこのままで表記しておく。

f.203b

(دانشپزوه ص 233)

ندانستند که سلطان را آخر عمر بود که سحرگاه در زیر ابر پنهان شد

(مدرسی طباطبائی ص. 262)

ندانستند که سلطان را آخر عمر بود..... که سحرگاه در زیر ابر پنهان شد

(نسخه اصلی)

ندانستند که سلطان را آخر عمر بود که سحرگاه در زیر ابر پنهان شد

モダッレスィー版の空白部は不要である。

f.205b

(دانشپزوه ص. 235)

زمانه خود يك گوشه کمان بقای خوارزمشاه بشکست، در این غصه میوه بیفکند.

(مدرسی طباطبائی ص. 265)

زمانه خود یک گوشه کمان بقای خوارزمشاه بشکست، در این غصه.....میوه بیفکند.

(نسخه اصلی)

زمانه خود يك گوشه

کمان بقای خوارزمشاه بشکست. درین غصه سبز

میوه بیفکند.

モダッレスィー版の空白箇所は sabz mīwa と読みめるが、なお疑問は残る。

f.207b

(دانشپژوه ص.238)

سراسر لجه بی ساحل، در [کار مردم] داری و مروّت پایة او تا حدی بود که بی نشان

f.208a
شود.

f.207b

(مدرسی طباطبائی ص.267)

سراسر لجه بی ساحل در داری و مروّت، پایة او تا حدی بود که بی نشان

f.208a
شود

f.207b

(نسخة اصلی)

سراسر لجه بی ساحل.

در کلاه داری و مروّت پایة او تا حدی بود که

با وجود او فقر و فاقه نزدیک آن بود که بی نشان

f.208a
شود

両版ともに情報の欠落が目立つ部分である。写本では、これを完全に補うことができる。

f.209b

(دانشپژوه ص.240)

اجلّ عالم، شمس الدین پسر خواجه طلحه از سابقان علم است

(مدرسی طباطبائی ص.270)

اجلّ عالم، شمس الدین..... از سابقان علم است.

(نسخه اصلی)

اجل عالم شمس الدین پسر خواجه طائفه ؟ (طلحه) از سابقان علم است.

f.210a

(دانشپژوه ص.240)

در این حال از اصفهان جز ... عزالدین...و امیر بار در درگاه ... و

(مدرسی طباطبائی ص.270)

در این حال از اصفهان جز.....

(نسخه اصلی)

در این حال از اصفهان جز اخا عز الدین مستوفی شمس الدین

امیر بار در درگاه معروفی نیست.افر داد. و

写本でも一部が読めないところであるが、二つの刊本の欠落部分を大幅に補うことができる。

(f.210b)

(دانشپژوه ص.241)

چرخ سبزپوش را اگر دست رسد، خورشید و ماه را گوش گرفته پیش کش ... کند، جهان صلاى اقبال به مکان او تازه کرد،

(مدرسی طباطبائی ص.271)

چرخ سبز پوش را اگر دست رسد، خورشید و ماه را گوش گرفته پیش کش [پیشگاه او] کند. جهان صلاى اقبال به مکان او تازه کرد،

(نسخه اصلی)

چرخ سبز پوش را اگر دست

رسد خورشید و ماه را گوش گرفته پیش کش

خدمت او کند. جهان مثلا اقبال بمکان او تازه
کرد.

どちらの刊本でも khidmat-i ū が欠けている

f.211b

(دانشپژوه ص.241.)

جماعتی بی آلت که در دیوان به اشک تر دهی خراب می کردند

(مدرسی طباطبائی ص.272)

جماعتی بی آلت که در دیوان به.....دهی خراب می کردند

(نسخه اصلی)

جماعتی بی آلت که در دیوان بانگ در دهی خراب می کردند

f.211b

(دانشپژوه ص.242)

احوال دیوان انشاء بر این جمله است که ... نمی آید.

(مدرسی طباطبائی ص.272)

احوال دیوان انشا بر این جمله است که به شرح می آید:

(نسخه اصلی)

احوال دیوان انشا برین جمله است

که یاد کرده می آید.

二つの刊本では未解読部分、あるいは誤りがあるが、写本では疑問の余地のないところである。

f.212a

(دانشپزوه ص.242)

صديق صدوق كنت حارسه ارمى

(مدرسى طباطبائى ص.273)

صديق صدوق أم.....يرمى

(نسخة اصلى)

صديق صدوق كنت عن قوسيه ارمى

詩の一部で、読解が難しいところ。

f.213a

(دانشپزوه ص.243)

بلاغت ديگران به اضافت به عبارت او پولى باشد از آن سوي، و بد مزاجى كند كه كتاب جهان به خدمت او چون سايه بر رخسار

(مدرسى طباطبائى ص.274)

بلاغت ديگران به اضافت به عبارت او پلى باشد از آن سوي، و.....كند كه كتاب جهان به خدمت او چون سايه بر رخسار

(نسخة اصلى)

بلاغت ديگران باضافت

بعبارت او پولى باشد. از آن سوي رود. واجب

كند كه كتاب جهان بخدمت او چون سايه بر رخسار

f.214a

(دانشپزوه ص.244)

با وجود شفقت جلال الدين....كه به احترام مخصوص باشد،

(مدرسی طباطبائی ص 275)

با وجود شفقت جلال الدین ... که به احترام مخصوص باشد.

(نسخه اصلی)

با وجود شفقت جلال الدین همانا که با احترام مخصوص باشد.

f.214b

(دانشپژوه ص 245)

درخت بزرگی او لطافت معنی بار دهد، والا صاحب علم و قلم است.

(مدرسی طباطبائی ص 276)

درخت بزرگی او لطافت معنی بار دهد.....صاحب علم و قلم است

(نسخه اصلی)

درخت بزرگی او لطافت معنی بار دهد. والا صاحب علم و قلم است

f.214bは、ダーネシュパジューフ版のとおりである。

f.231b

(دانشپژوه ص 265)

اهلکامل شد. قدر اهل قلم جز عالم نداند، و توقع باران جز از ابر نشاید

(مدرسی طباطبائی ص 299)

.....کامل شد. قدر اهل قلم جز عالم نداند، و توقع باران جز از ابر نشاید

(نسخه اصلی)

هلال اهل عالم بمکان او بزر کامل شد.

قدر اهل علم جز عالم نداند. توقع باران جز ازابر نشاید

f.234b

(دانشپژوه ص.268)

و ری و ساوه و قم و آبه و کاشان و قزوین و اصفهان لشکر پادشاه زاده قتلغ اینانج
به وقت اتابک مظفرالدین به کوهستان خطبه به نام هیچ سلطان سلجوقی نمی فرموده،

(مدرسی طباطبائی ص.301-302)

و ری و ساوه و قم و آبه و کاشان و قزوین و اصفهان لشکر پادشاه زاده قتلغ اینانج به
وقت اتابک مظفرالدین به کوهستان خطبه به نام هیچ سلطان سلجوقی نمی فرموده،

(نسخه اصلی)

و ری و ساوه و قم و آبه و کاشان و قزوین و اصفهان
در دست لشکر پادشاه زاده قتلغ اینانج. بوقت
حضور اتابک مظفر الدین بکوهستان خطبه بنام
هیچ سلطان سلجوقی نمی فرمود.

ダーネシュパジューフ版、モダッレスィー版ともに空白としている、写本1
行目の「イスファハーン……」以降を補うと「そしてレイ、サーヴェ、コム、
アーベ、カーシャーン、カズヴィーン、イスファハーンは、パーデシャーザー
デ・クトウルグ・イナンチの手に (落ちた)」となる。

Fo.235a

(دانشپژوه ص.268)

آفتابی اند که زایل نشوند،

(مدرسی طباطبائی ص.302)

آفتابی اند کهزایل نشوند،

(نسخه اصلی)

آفتابی اند که نسب زائل نشود

f.235a

(دانشپژوه ص.268)

عافل دل در جهان نبندد. آب قاروره ... را بر وی بار باید کرد، این ...ختم بهتر.

(مدرسی طباطبائی ص.302)

عافل دل در جهان نبندد. آب قاروره ... را بر وی بار باید.ختم بهتر.

(نسخه اصلی)

عافل دل در جهان نبندد.

آب قازوره بیمار بدان پاکی نباشد که طیب را

بر وی ناز باید کرد. کتاب در آن شد.

ختم بهتر.

f.235a の 2 つの難読箇所も、原本では、6 つの単語を完全に読み取ることができる。ただし、写本のまま表記した qāzūra は、両校訂者の通り、qārūra であろう。

f.235b

(دانشپژوه ص.268-269)

سلطان طغرل بطن ششم است از سلطان داود. جغریک سلجق را پنج پسر بود: میکائیل پدر سلطان

داود، جغر بیک، و سلطان طغرل بک، و اسرافیل پدر قتلش، موسی ییغو، یوسف پدر ابراهیم!

ینال بوس، پدر ارتغرل(؟)، سلطان داود. جغریک را سه پسر بودند، سلطان الب ارسلان

محمد، یاقوتی پدر ملک اسمعیل، سلطان الب ارسلان را هشت پسر بودند، سلطان ملکشاه،

ارغون، طغانشاه، بوری [با]رس، تکش، تنتش، قلیچ ارسلان الیاس، سلطان ملکشاه را چهار پسر بودند ... سلطان محمد ینانچ ... سلیمان ... سلطان طغرل را دو پسر بودند. سلطان ارسلان، و ملک محمد سلطان ارسلان، پسر سلطان طغرل است.

(مدرسی طباطبائی ص. 302-303)

سلطان طغرل بطن ششم است از سلطان داود جغریک. سلجق را پنج پسر بود: میکائیل پدر سلطان داود جغر بیک، و سلطان طغرل بک، و اسرافیل پدر قتلش، موسی بیغو یوسف پدر ابراهیم، نیال بوس پدر ارتغرل. سلطان داود جغریک را سه پسر بودند: سلطان آلب ارسلان محمد، یاتوتی پدر ملک اسماعیل. سلطان آلب ارسلان را هشت پسر بودند: سلطان ملک شاه، شرغون، طغان شاه، بوری بارس، تکش، تنتش، قلیچ ارسلان، الیاس. سلطان ملک شاه را چهار پسر بودند: سلیمان سلطان طغرل را دو پسر بودند: سلطان ارسلان، و ملک محمد. سلطان ارسلان [را] پسر، سلطان طغرل است.

以下では、写本の表記に添ったものと、写本の人名表記を実名に近づけたものの二つを示す。

(نسخه اصلی)

سلطان طغرل بطن ششم است از سلطان داود.
جغریک سلجق را پنج پسر بود. میکائیل بدر سلطان
داود. جغریک. و سلطان طغرل بک. و اسرافیل.
بدر قیلش. موسی بیغو یوسف. بدر ابراهیم نیال
بوس. بدر ارتغرل. سلطان داود. جغریک را
سه پسر بودند. سلطان آلب ارسلان. فاوزن
یاتوتی بویی. بدر ملک اسمعیل. سلطان آلب ارسلان
را هشت پسر بودند. سلطان ملکشاه. ارغون.
طغانشاه. بوری رس. تکش تنتش. قلیچ ارسلان.
الیاس. سلطان ملکشاه را چهار پسر بودند.

محمود. محمد. برکیارق. سنجر. سلطان محمد را
بنج پسر بودند. محمد. طغرل. مسعود. سلیمان. سلجق.
سلطان طغرل را دو پسر بودند. سلطان ارسلان.
و ملك محمد. سلطان ارسلان پسر سلطان طغرل است.

人名表記や単語の表記を改めたもの。慣用的な表現（ChaghriをJaghriとするような）は、そちらを採った。

سلطان طغرل بطن ششم است از سلطان داؤد.
جغریبک سلجق را پنج پسر بود. میکائیل پدر سلطان
داؤد. جغریبک. و سلطان طغرلبک. و اسرافیل.
پدر قتلش. موسی بیغو یوسف. پدر ابرهیم ینال
بوس. پدر ارتغرل. سلطان داؤد. جغریبک را
سه پسر بودند. سلطان الپ ارسلان. قاورت
یا قوتی بوی. پدر ملك اسمعیل. سلطان الپ ارسلان
را هشت پسر بودند. سلطان ملکشاه. ارغون.
طغانشاه. بوری برس. تکش تتش. قلیج ارسلان.
الیاس. سلطان ملکشاه را چهار پسر بودند.
محمود. محمد. برکیارق. سنجر. سلطان محمد را
پنج پسر بودند. محمد. طغرل. مسعود. سلیمان. سلجق.
سلطان طغرل را دو پسر بودند. سلطان ارسلان.
و ملك محمد. سلطان ارسلان پسر سلطان طغرل است

以上は、セルジューク家の系譜を述べたものである。写本235bの6行目、スルターン・アルプアルスラーン Sultān Alp Arslānの後には、ダーネシュパジューフ版、モダッレスィー版が記載しているムハンマド Muḥammadの語はない。10行目の「スルターン・マリクシャーには4人の息子があった」との記述のあとには、マフムード Maḥmūd、ムハンマド Muḥammad、バルキヤールク Barkiyārq、サンジャル（前出）の名が記されている。そのあとは、「スルターン・ムハンマドには5人の息子があった。ムハンマド、トゥグリル、マスウー

ド Mas‘ūd、スライマーン Sulaymān、サルジユク Saljuq (ママ) である」の文が続く。モダッレスィーは、イブラーヒーム・イナール Ibrāhim Yināl (原文・4行目) を二人の人間として名前を分割しているが、これはもちろん同一人である。

書写年代

最後にこの写本の書写年代について触れよう。f.236aには、記載があるが、これも難読箇所である。汚れはないが、達筆なため、校訂者は読解に苦勞している。筆跡が、この部分だけは別人のもののように見える。

f.236a

(دانشپژوه ص.269)

تم الكتاب و آله

بعون الله و حسن توفيقه

في يوم الخميس الابع

في شهر شوال ختم

بالخير و الاقبال

اثني سبعين

و سبعمائة

سنه 707

(مدرسى طباطبائی ص.303)

تم الكتاب بعون الله و حسن توفيقه في يوم الخميس السابع

من شهر شوال ختم بالخير و الاقبال لسنة اثني سبعين و سبعمائه . سنه 772

(نسخة اصلی)

محمد تم الكتاب و آله

بعون الله و حسن توفيقه

في يوم الخميس السابع

من شهر شوال ختم

بالخير و الاقبال

لسنه اثنى سبعين

و سبعماً

سنه 707

写本の1行目、*تم الكتاب* の両脇にある *محمد* と *آله* は、前の文の結尾にあたる。ダーネシュパジューフは、前の文と、この箇所では *آله* を重複している。この箇所は削除すべきである。同版は、アラビア語で書かれた書写完成の日付と曜日を読みとくことができず、意味不明である。モダッレスィーの読んだ、「七七二年シャッワール月七日木曜日」は、イスラム暦でも、正しく相応している。

写本そのものに、誤記がある可能性もある。最下部で同一の筆跡にて、数字で707（写本では、もちろんアラビア数字で書かれているが、ここでは技術的な問題から、洋数字に置き換えておく）年と書かれているのは、アラビア語の七七二年とは矛盾する。707年シャッワール月七日は日曜日なので、ありえない年代である。写字生のミスであろう。ただし、モダッレスィー版が、この部分を書き直し、727年としているのは、明らかに行き過ぎである。原本のまま707年とした上で、註記を行うべきである。清水も旧稿では、写本の書写年代を、数字の部分に従って707年としたが、ここに訂正しておく（清水、625ページ）。なお、ダーネシュパジューフ編の『テヘラン大学中央図書館マイクロフィルム目録』では、書写年月日を「七七二年シャッワール月七日木曜日（707の数字つき）」と、正しく表記している（同書、p.39）。

結語

ダール・アルクトゥブ所蔵のペルシア語孤写本『宰相たちの歴史』は、1～236フォリオからなる、欠落部のない完全な写本である。ただし、第64フォリオ（64の表と裏）は、本来は第47と第48フォリオの間にあるべきものが、綴じ間違えによって、もとの第62と第63番目に綴じこまれ、そのあとで通し番号を記入されてしまったものである。

第180フォリオの裏と第181フォリオの表が、ダーネシュパジューフ版では落ちていて、モダッレスィー版では補填されている。これはフォリオの欠落ではなく、マイクロフィルムからの焼きつけのミスで抜けてしまったものである。

第233フォリオの裏と第234フォリオの表が、ダーネシュパジューフ版、モダッレスィー版の双方で落とされている。これについては、指摘する者はなかった。

この部分は、イラク・セルジューク朝最後のスルターン・トゥグリル三世と、大アターベクであったムザッファル・アルディーン・クィズィル・アルスラーンの抗争、カリフを巻き込んだ連合勢力とスルターンの戦いを記述した政治的にも重要な史料である。また、『宰相たちの歴史』執筆年代決定にもかかわる出来事を記述したところであり、欠けることは許されない。本稿では、これを元の写本から復元して補った。

ダーネシュパジューフ版、モダッレスィー版は、一部の内容の欠落のため、どちらも原写本のフォリオ番号をとばす結果となり、そのため元の写本とは異なる番号を校訂稿中に典拠として掲げてしまった。重大な問題なので、以下に一覧として訂正を示しておく。

写本と「刊本に記載のフォリオ番号」対照表

ダール・アルクトゥブ原本

1～236

ダーネシュパジューフ版

1～47は、原写本と同じ

64は47と48の間に置かれるが、以下の番号は変更なし

48～180aまでは原写本と同じ

180b～232aは、原写本の181b～233aにあたる（要訂正・+1とすべき）

233a～234aは、原写本の235a～236aにあたる（要訂正・+2とすべき）

モダッレスィー版

1～47は、原写本と同じ

64は47と48の間に置かれるが、以下の番号に変更なし

48～233aは、原写本と同じ

234a～235aは、原写本の235a～236aにあたる（要訂正・+1とすべき）

両刊本を利用される方は、上記の訂正箇所を直した上で使われることが望ましい。

2種の刊本には、それぞれに一長一短がある。全体としては、ダーネシュパジューフ版の方が、ケアレスミスはあるが、原本に忠実で誠実な校訂であるという印象を受ける。後から出版されたモダッレスィー版は、2ページ分の脱落箇所を指摘して補っているところが評価されるが、難読箇所の読解において後退しているのは、残念である。また、「意識」的に形を直していて、注記もない箇所も目立つ。孤写本の校訂であることを考慮すれば、写本をあまり補正せず、元の形をいかして情報を提示する方が望ましいともいえるのではないだろうか。

写本の校訂では、通常マイクロフィルムを使うことが多いが、今回は、その限界も明らかになった。やはり原本にあたることの重要性が痛感される場所である。

参考文献

一次史料

Najm al-Dīn Abū al-Rijā' Qummī, *Ta'rikh al-Wuzarā'*, Moḥammad Taqī Dāneshpazhūh (ed.), Tehrān, 1363/1985. (Dと略記、またはダーネシュパジューフ校訂本、ダーネシュパジューフ版とする)

Najm al-Dīn Abū al-Rijā' Qummī, *Dhayl Naftha al-Maṣḍūr*, Ḥoseyn Modarresi Ṭabāṭabā'ī (ed.), New Jersey, 2007. (Mと略記、またはモダッレスィー校訂本、モダッレスィー版とする)

Nāṣir al-Dīn Munshī Kirmanī, *Nasā'im al-Ashār min Laṭā'im al-Akhbār dar Ta'riḫ-i Wuzarā'*, Mīr Jalāl al-Dīn Ḥoseyn 'Ormavī (ed.), Tehrān, 1337/1958.

Sayf al-Dīn Ḥājī b. Nizām 'Uqaylī, *Āthār al-Wuzarā'*, Mīr Jalāl al-Dīn Ḥoseyn 'Ormavī (ed.), Tehrān, 1337/1958.

Ghiyāth al-Dīn b. Humām al-Dīn Khwāndamīr, *Dastūr al-Wuzarā'*, Sa'id Nafīsī (ed.), Tehrān, repr. 2535/1976.

Sa'ad al-Dīn Warāwīnī, *Marzbān-nāma*, Moḥammad b. 'Abd al-Wahhāb (ed.), Tehrān, 1337/1958. (『マルズバーン・ナーメ』)

Abū Ḥāmid Muḥammad b. Ibrāhīm, *Dhayl-i Saljūq-nāma*, Tehrān, 1332/1954. (『セルジューク・ナーメ続編』)

二次史料

Luther, K. A., "A New Source for the History of the Iraq Seljuqids: *The Tārīkh al-Vuzarā'*," *Der Islam*, 45, 1969, pp.117-128. (ルーサー)

Fairbanks, S.C., *The Tārīkh al-Vuzarā': a History of the Saljuq Bureaucracy* (Ph.D. Dissertation), The University of Michigan, 1977. (フェアバンクス)

'Alī Ṣafarī Āq Qal'ē, "Dhayl Naftha al-Maṣḍūr...", *Gozāresh-e Mīrāth*, Doure-ye Dovvom, Shomare-ye 21, 22, 1387, 2008. (「アクカレ書評」)

Moḥammad Taqī Dāneshpazhūh (ed.), *Fehrest-e Mikrofīlmhā-ye Ketābkhāne-ye Markazī-ye Dāneshgāh-e Tehrān*, 1348, Tehrān. (『テヘラン大学中央図書館マイクロフィルム目録』)

Ḥoseyn Modarresī Tabātabā'ī, "Qom dar Dhayl Naftha al-Maṣḍūr," *History Lib.*, <http://www.historylib.com/Site/SView Document.aspx? DocID=824&RT=List>

anon., "Dhayl Naftha al-Maṣḍūr...", *Markaz-e Pazhūheshī-ye Mīrāth-e Maktub*, 1388, 2009, <http://www.mirasmaktoob.ir/modules.php?name=mketab&mid=55>

謝辞

モダッレスィー版を早々にご貸与いただき、あわせて情報をご教示くださった森本一夫氏に深く感謝いたします。また、かつて刊行直後にダーネシュパジューフ版をご恵与くださった八尾師誠氏、清水の旧稿に表記されている写本のフォリオ数と、ダーネシュパジューフ版におけるフォリオ数との違いについてお問い合わせくださった山本盾氏にも、厚く感謝の意を表します。